

2022. 1. 16. 主日礼拝説教
聖書：マルコによる福音書6章1～6a節
『現実を受け入れるために』

奇跡、つまり行為と教えは不可分のものである。分かり易く言えば、初代教会は誰と共に生き(行為)、同時に共に生きることの基本(教え＝福音)を何に置いたのかということなのです。その二つのどちらが欠けても奇跡(十字架と復活)は成立しないのです。

本日の聖書の箇所はイエスの故郷であるナザレを舞台として記されます。発端は2節にありますように「イエスは会堂で教え始められた」、まさにその教え、つまり人々の驚きと中傷の原因はイエスの語られる福音の内容そのものの中にあつたのです。そして、故郷の人々はイエスの語る福音に対して等しく「つまづいた」(3節)のです。人々は口々に「大工ではないか」「マリアの息子ではないか」と揶揄します。大工という言葉は石工から鍛冶屋までを含めた建築労働に関わるすべての職業を指しました。自分たちと大して変わらない程度の社会的評価という位の意味でしょう。マリアの息子というのは、本来ならヨセフの息子という呼称が正しいのですが、これは相手を愚弄する時の呼び方です。

わたしたちも当時のナザレの人々と同じような反応をしてしまうことが往々にしてあるものです。自分が聞いたこともないし経験したことのない(と思い込んでいる)事柄に直面させられた時に、怒りや不安という対応が先立って噴出し、その事柄の本質を受け入れられないばかりか受け入れたら「負け」だと言わんばかりに拒絶するような場面に出くわすこともあるのです。

同郷の人々にこれほどまでに嫌悪感をもって迎えられたイエスの福音とはどんなものだったのでしょうか。

このことについてマルコは沈黙しています。しかし、ルカ4章16節以下でその内容が明らかにされてゆきます。それはイザヤ61章の「貧しい人に福音を告げ知らせるために」という内容でした。ナザレとは中央のエルサレムからみ

ればちっぽけな地方の町です。それ故、中央に対する妬みや嫉みのはびこっていました。ですから、ここでイエスが「あなたたちが一番」とも言えれば人々は喜んで迎え入れたのでしょう。けれども悲しいかな、それは福音ではないのです…。

そして、同じくルカはサレプタのやもめ(列王記上 17;9)とシリア人ナアマン(列王記下 5;1)の当時よく知られていた話を記します。その結果、人々はイエスを崖から突き落とそうとしたのです。なぜならば、それらの一連の話はすべて人々の現実の生活を「問う」ものだったからです。

福音の質とは実は厳しく問われることから始まります。何が問われるのか。それは自分自身の体質なのでしょう。ナザレの人々が同郷のよしみでイエスにすり寄ったのは、甘い自己肯定を期待してのことだったかと思います。しかし、イエスは人々の在り方の本質を問うのです。それは同郷という「人の言葉」ではなく、「神の言葉」としての現実の受け入れ直しでした。

現実を受け入れるなどと考える時、わたしたちはしんどさを思い浮かべてしまいがちです。けれども、何も厳しさや辛さに歯を食いしばって耐えることではありません。現実を受け入れるとは、弱く小さい者たちを大事にされる神の業を知り、そのことに行為と福音をもって参加して行くことなのです。そこに自分が変わるという奇跡が成立して行くのです。